

西油山および荒平山周辺の歴史散策マップ記

内山 敏典

はじめに

筆者はこれまで『早良逍遥マップ記—歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ—』(2003年)、『続早良逍遥マップ記—鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ—』(2005年)、『福岡都市圏歴史散策マップ記』(2009年)、『福岡(筑前)およびその関連地域の歴史散策マップ記—とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について—』(2011年)、『旧三瀬街道とその周辺逍遥マップ記—伊能忠敬一行の測量から200年を経過して—』(2015年)、『唐津・多久・大町地域周辺散策記—歴史的遺産を通じて、現在・過去・未来を考える—』(2017年)、『路地から見る歴史と文化—「まち」おこしでの財産を活かすため—』(2018年)および『筑紫国(福岡県)周辺の古代城跡からみる歴史—「まち」おこしとしての財産を活かすため—』(2020年)を上梓した。『早良逍遥マップ記』、『続早良逍遥マップ記』および『旧三瀬街道とその周辺逍遥マップ記』は旧早良郡(現在の福岡市早良区・城南区・西区)の史跡名勝を歩き歩数と地図を作成し、それらの史跡名勝の謂れ等を記述したものである。残りの5冊は「まち」おこしを中心に旧早良郡以外のウェートを占める内容である。

今回(2020年5月、6月)は、現在の早良地域歴史の礎となる西油山および荒平山とそれぞれの周辺の史跡名勝を散策し、記述することを目的とする。西油山は天福寺廃寺を中心とした僧坊跡があり、荒平山は大内氏の没落後小田部氏が城主となり、現在は安楽平城址本丸、二の丸、三の丸および出丸が残っており、三の丸北側の城壁があり、その下には武家屋敷(城下町)跡があると伝えられている場所が存在している。中世の遺構が現在も残っているのは地域教育にとって意義があるものと思われる。前回はとくに2001年5月の19年前であった。当時の荒平山登山は山頂の安楽平城址(約300坪:一反)に上るところのみにロープが取り付けられていたが、今回は地域の方々によって整備(ロープやベンチ等)されている。ただ、他の登山ルートは整備されていないところもかなりあるので注意する必要がある。

本冊子では荒平城址、安楽平城址を同義語として用いている。それは荒平山にある城址であるということから荒平城址としているが、大内氏や小田部氏時代は安楽平城址である。登山ルートと城址遺構を示すためには荒平城址と安楽平城址をどうしても同義語として記述する必要があったことに留意していただきたい。

なお、マップに記載している歩数は OMRON HJ-005(感度調整:中)で、標高はマピオン地図からのものである。歩数は人によって異なり、標高は標高アプリを利用したものではないので参考としていただきたい。

目 次

| | | |
|---------------------------|-------|----|
| はじめに | ----- | i |
| 1. 妙見山マップ記 | ----- | 1 |
| 2. 片江山マップ記 | ----- | 19 |
| 3. 安楽平城址本丸・二の丸マップ記 | ----- | 33 |
| 4. 安楽平城址三の丸・武家屋敷（城下町）マップ記 | ----- | 51 |
| 5. 2001年当時の安楽平城址関連施設 | ----- | 73 |
| おわりに | ----- | 77 |
| 著者紹介 | ----- | 79 |

妙見山マップ記

1. 妙見山マップ記

西油山林道のゲート（福岡市早良区西油山 6 付近）から妙見山山頂（または油山山頂）への登山は、アスファルトの西油山林道を最後まで登り、そこからの分岐を妙見山山頂（または油山山頂）へのルートが一般的である。このルートは登りやすい反面、登山時間を要する。登山時間を短縮するには、徳栄寺から妙見山山頂（または油山山頂）までのショートカット登山がある。このルートは森林のなかを上っていくものでかなり体力を消耗するし、登山的なルートである。ショートカット登山は徳栄寺本堂裏の森林[写 1]から[写 15]の尾根までである。

東油山には歴史的な史跡名勝についての文献等が多く存在するが、西油山のそれらについてはよく知られていないようである。しかしながら、林道西油山線付近には、徳栄寺をはじめ、妙見山、妙見岩、西油山天福寺跡（坊城の趾）および野芥鬼塚があり、これらと関連ある史跡名勝はにごし川、龍樹権現社、泪ヶ原、正覚寺跡（正覚寺の鐘）である。

（1 章の参考文献）

青柳種信著／広渡正利・福岡古文書を詠む会編校訂『筑前國續風土記拾遺 下巻』文献出版, 1993 年6 月. 251～256 頁.

加藤一純・鷹取周成共編／川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『筑前國續風土記付録 中巻』文献出版, 1977 年12 月. 418～422 頁.

奥村玉蘭著／田坂大蔵・春日古文書を読む会校訂『筑前名所図会』文献出版, 1985 年12 月. 327～332 頁.

貝原益軒編／伊東尾四郎校訂『増補 筑前國續風土記』文献出版, 2001 年6 月. 457～474 頁.

福岡県早良郡役所『早良郡志』名著出版, 1973 年2 月. 後編172 頁. 178～180頁.

城南区一区一美推進委員会編者『ワンディ・ウォーキング 油山へ行こう』海鳥社. 1996 年8 月. 20～21 頁. 41 頁. 51 頁.

竹岡勝也著「西油山天福寺址」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第 9 輯, 1934 年 3 月. 149～162 頁.

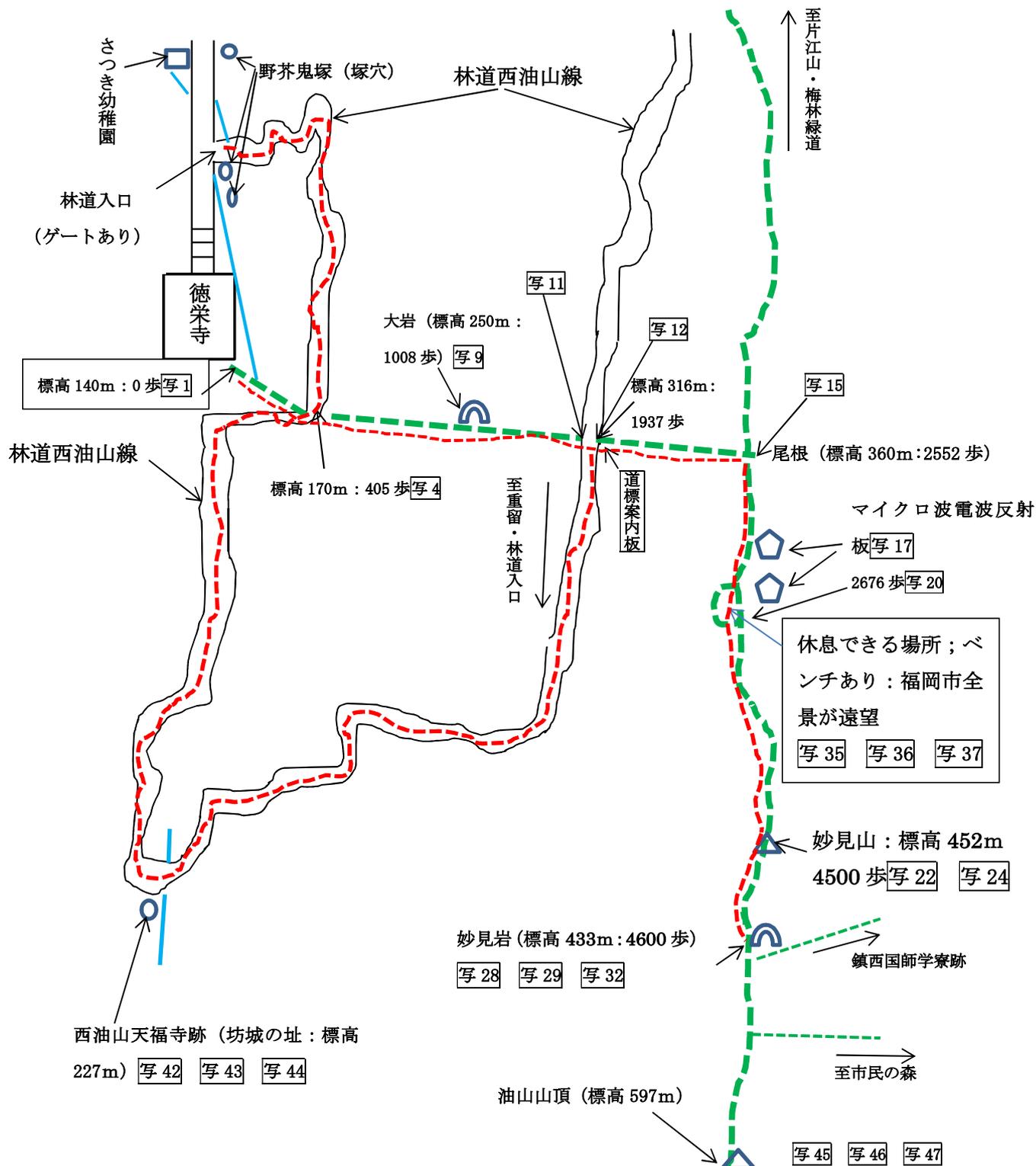
内山敏典『早良逍遥マップ記一歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ』九州産業大学. 2003 年 12 月. 28～29 頁.

妙見山（福岡市早良区野芥と城南区東油山の区境、標高 452m）

妙見岩（福岡市早良区野芥と城南区東油山の区境、標高 433m、これより南方面油山山頂
597m）

西油山天福寺跡（坊城の址：福岡市早良区重留と西油山の標高 224m）

野芥鬼塚（塚穴：福岡市早良区大字野芥）



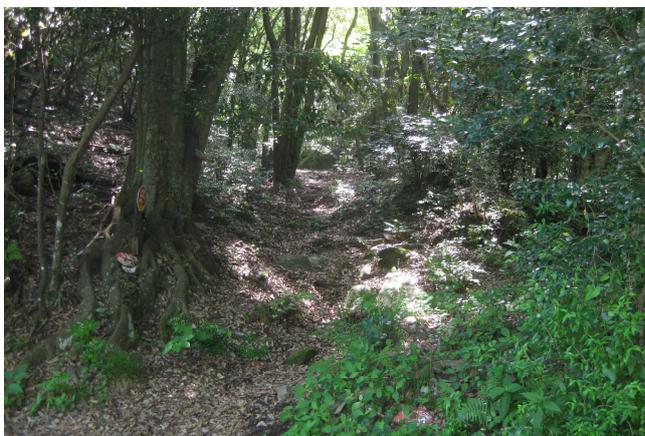
妙見山（452m）登山の往路は徳栄寺本堂の裏の山林（標高 140m）の中からの出発（0歩）し、林道西油山線ではなく、ショートカットで尾根道を登ってゆくルートの写真と歩数で示す。早良妙見東口バス停から徳栄寺本堂（含：石段 108 段）までは約 3500 歩である。復路は道標案内板から林道西油山線のゲートから早良妙見東口バス停までで、総歩数は約 20000 歩であった。

写 1：徳栄寺本堂裏の出発点（0 歩：標高 140m）



徳栄寺本堂裏の出発点（0 歩）

・
・
・



・
・
・

写4：林道西油山線との1回目の交差（405歩：標高170m）



林道西油山線との1回目の交差：手前のアスファルトが1回目の林道西油山線との交差：この上の尾根を登る。

・
・
・



・
・
・



写9 大岩 (標高 250m 1008 歩)

・
・

写 11 : 林道西油山線との 2 回目の交差 (1930 歩 : 標高 317m)



・
・

写 12 : 林道油山線との 2 回目の交差を渡り、妙見山等への入口 (1936 歩 : 標高 316m)



•
•
•



•
•
•

写 15 : 妙見山等への尾根道（登山道）（2552 歩：標高 360m）



上の方面は妙見山・妙見岩・油山への尾根道（登山道）

•
•
•



・
・
・



写 17 マイクロ波電波反射板

・
・
・

写 24 : マイクロ波電波反射板 (2676 歩)



マイクロ波電波反射板この横に展望所 (ベンチ有)

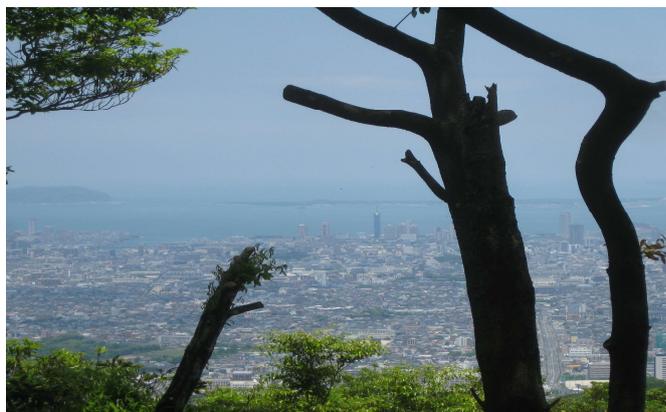
写 35 : 写 36 : 写 37 : 休息できる場所 ; ベンチあり : 福岡市全景が遠望 (2676 歩)



写 35



写 36



写 37

写 22 : 写 24 ; 妙見山山頂 (4500 歩 : 標高 452m)



写 22 : 妙見山山頂



写 23 : 妙見山山頂

⋮



・
・
・

写 28 : 写 29 : 写 32 ; 妙見岩 (4600 歩標 : 標高 433m)



写 28



写 29



写 32

妙見岩からの復路は写真 12 の林道油山線の道標案内板まで下り、そこから林道を左折し林道入口（ゲート）方面まで下っていく。その途中に西油山天福寺廃寺（坊城の址）がある。天福寺廃寺の地図上の位置は城南区一区一美推進委員会・城南区役所監修『ワ
ンティ・ウォーキング 油山へ行こう』図書出版海鳥社.1996 年 8 月.20～21 頁.

写 42 : 写 43 : 写 44 : 西油山天福寺跡（坊城の址：標高 227m） 写 42 写 43 写 44



写 42 : 西油山天福寺跡にある石碑



写 43 : 石碑付近にある沢

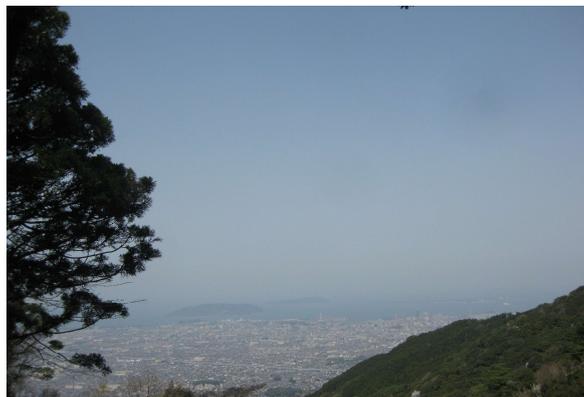


写 44 : 林道からの石碑

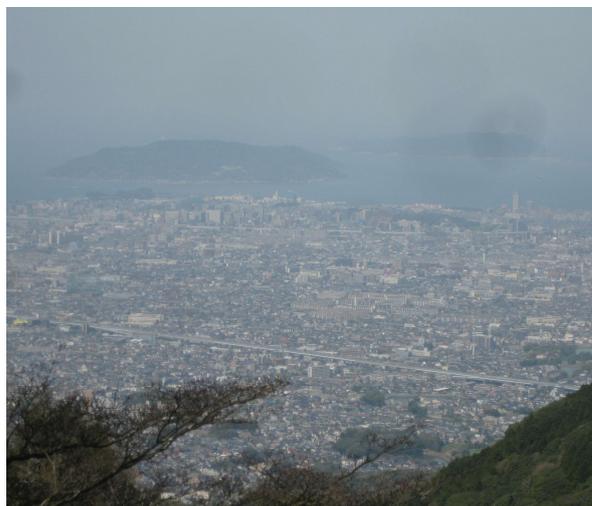
写 45 : 油山山頂 (標高 597m)



写 46 : 油山山頂からの遠望 1



写 46 : 油山山頂からの遠望 2



妙見山 徳栄寺（福岡市早良区大字野芥 2-2）

徳栄寺は佐賀県の大町町（おおまちちょう）で佐賀炭鉱および昭和鉱業所（福岡県宇美町）等の経営者で貴族院議員でもあった中島徳松（1951（昭和26）年12月2日、77歳で没）が1934（昭和9）年に建立したとのことである。福岡市中央区ある料亭稚加栄は中島徳松の持ち家を1961（昭和36）年に改装されたものである。

徳栄寺の徳は徳松の「徳」、栄は徳松の妻である栄子の「栄」を合わせて徳栄寺と名づけているとのこと。早世した長男や炭鉱事故で亡くなった人々の菩提を弔うための建立とのこと。その名残か早良区野芥の妙見口五差路の門のタバコ屋さんには「お願い 切符は必ず停留所でお買い求めの上乗車前に車掌にお示し下さい：旅館 嬉野館：嬉野温泉」というコマーシャルがかかっている看板があったが、現在は建替えがなされたのでその看板は外してある。詳細は内山敏典『早良逍遥マップ記一歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ』（29～30頁）を参照のこと。



紅葉の徳栄寺



徳栄寺本堂

妙見山と妙見岩

妙見山は油山山頂登山への途中にあり、徳栄寺の山号（山號）に用いられている。妙見岩は、妙見山山頂から油山山頂へ向かうと、鎮西国師学寮跡と油山山頂との分岐地点にある。加藤一純・鷹取周成共編『筑前國續風土記付録（中巻）』（417頁）には「油山の絶頂にあつて、高さ五尺（1.52m）横三間（5.43m）枡形の大石があり、昔から鎮守妙見菩薩と称している。」との記述がある。また、分岐地点にある妙見岩の説明板には「昔、北辰妙見大菩薩がまつられていた。ところで龍樹権現の上宮と称されているが、今は大岩のみが残っている。干ばつするとき、焚火をたき、太鼓をたたいて、雨乞いをした場所」との説明がなされている。

西油山天福寺跡（坊城の趾）と泪が原

貝原益軒編『増補 筑前國續風土記』（467～468頁、473～474頁）によれば、「昔は龍樹

権現の下に、天福寺という禅寺があった。山號は西油山（さいゆうさん）と言っていた。このあたりには 360 の僧坊があったが、いまは竹林となり僧坊の跡が多くある。その東に泪が原というところがあり、寺僧の葬地ではないかといわれている。天福寺が廃寺となったのは、脊振山東門寺の侍童（じどう：さぶらいわらわ）が過失あって天福寺にかくれ、東門寺の引き渡しを拒んだため争いになり、双方の僧による兵火（へいか：争による火災）があった。西油山天福寺焼失後は再興されなかった。」とのことであった。西油山天福寺址については、昭和初期に竹岡勝也氏によって調査（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第 9 輯）がなされていて経筒（きょうづつ）、香爐（こうろ）、合子（ごうす：蓋付の椀）などの遺物を蒐集している。

なお、当時の東門寺の敷地（領）は、東は御笠郡通古賀、北は那珂川郡仲村、西北は早良郡東入部村それぞれに境界に燈籠堂を置いている。この燈籠堂の名残は、当時の場所ではなく、現在東入部のタイヘイ M&C 福岡西営業所裏の東入部 6 丁目 16 付近の草むらに移されている。



燈籠堂板碑



燈籠堂板碑の梵字

龍樹権現社

貝原益軒の『筑前国続風土記』（474 頁）に油山の七分高き所に龍樹権現（りゅうじゅごんげん）の社の跡があってその下に大岩があり、さらにその下に「つぶて石」があるとの記述がある。また、龍樹権現の社の下に天福寺があったとの記述もある。その龍樹権現は現在海神社（わだづみじんじゃ：福岡市早良区西油山 236）に移されているとのことである。



海神社本殿



海神社鳥居

野芥鬼塚（塚穴：福岡市早良区野芥）

塚穴は豪族の墓とも、僧坊跡ともいわれている。また、その穴から出てきた人の容姿が鬼のように見えたので鬼塚といわれている。貝原益軒『増補 筑前國續風土記』（457～458頁）において、「野芥村に25の石窟があり、入り口はせまく、奥は広い」との記述がある。現在、野芥鬼塚は3基の石窟が残っている。周辺には石窟らしき盛土がいくつもあるが、つぶれておりそれらが塚穴かどうか調査が必要である。



野芥塚穴（桜の木の横）



野芥塚穴（林道入口横）



野芥塚穴（林道入口横）

にごし川（福岡市早良区野芥）

福岡県早良郡役所『早良郡志』（180頁）によれば、野芥の東を流れる川を「にごし川」といっていたが、今は訛って西川という。水源は西油山で、往昔西油山360坊の食用米を磨ぐ液汁が流れてくるので、この名がついたと記述している。この「にごし川」もしくは西川は現在の油山川である。

正覚寺跡（正覚寺の鐘：早良区重留4丁目14付近）

貝原益軒編『増補 筑前國續風土記』（459頁）によれば、重留に昌法山正覚寺の寺跡がある。小田部氏の帰依寺とあり。そしてこの寺院の趾に鐘を埋めたとのことで、黒田長政の家臣吉田壹岐がこの郡司であったとき、掘り出している。最終的に聖福寺に置かれているとの記述がある。正覚寺跡は観音の祠に地藏堂がある。



正覚寺跡



正覚寺跡

片江山マップ記

2. 片江山マップ記

油山山頂登山は、一般的には市民の森からの登山ルート、1章の林道西油山線終点からの登山ルート、徳栄寺の本堂裏からのショートカット登山ルートがある。本章はショートカット登山ルートで、林道西油山線の終点からの登山ルートで片江展望台・片江山・梅林緑道登山ルートを示している。これらのルートを逆に梅林緑道から登山することができる。

梅林駅方面から油山方面を遠望すると山が重なっているのがわかる。この中の梅林緑道山頂から3番目の山が片江山である。20年前この片江山山頂に行く途中は花木があり、また町並が見渡せたが、現在は部分的にしか見ることしかできない。片江山山頂は標高276m表示の低山であるが、結構ハードなコースである。片江山山頂から片江展望台へのルートはそれほどきつくない。山頂には休憩ベンチはあるが眺望することはできない。

(2章の参考文献)

福岡水道局『福岡市水道五十年史』1975年6月. 65頁.

国土地理院「地理院地図/GSI Maps」<http://maps.gsi.jp/>

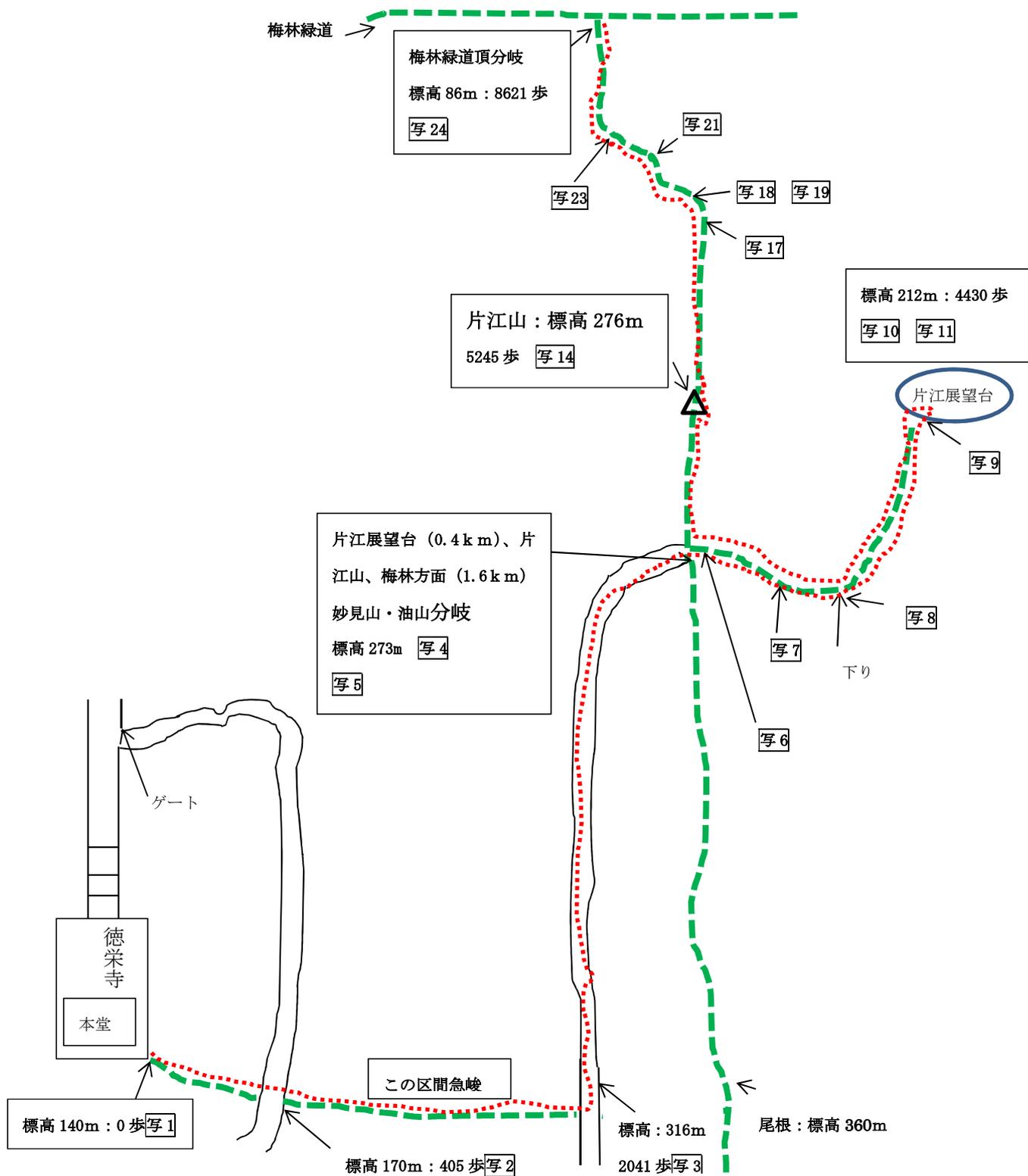
城南区一区一美推進委員会編者『ワンディ・ウォーキング 油山へ行こう』海鳥社. 1996年8月. 13～21頁. 39～51頁.

内山敏典著『福岡都市圏歴史散策マップ記』九州産業大学産学連携室, 2009年5月.

片江展望台（福岡市城南区片江：標高 212m：4430 歩）

片江山山頂（福岡市城南区片江：標高 276m：5245 歩）

梅林緑道頂（福岡市城南区梅林：標高 86m：8621 歩）



写1：徳栄寺本堂裏の出発点（0歩：標高140m）



写2：林道西油山線との1回目の交差（432歩：標高170m）



写3：林道油山線との2回目の交差（2041歩：標高317m）



写4：片江展望台方面（0.4km）、片江山（梅林緑道）方面（1.6km）、妙見山（油山）方面の分岐（標高273m）



写5：分岐の梅林方面



写6：分岐から片江展望台方面への降口



写7：片江展望台への途中の登山道



写8：片江展望台への途中の登山道



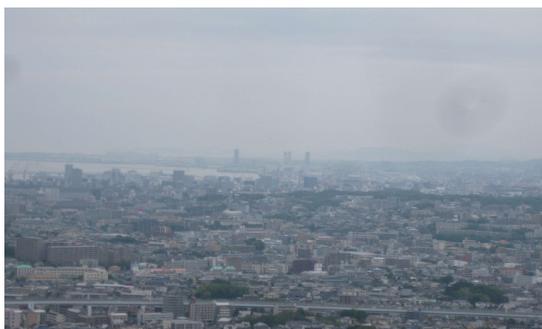
写9：片江展望台への登山道の出口



写 10 : 片江展望台からの福岡市遠望



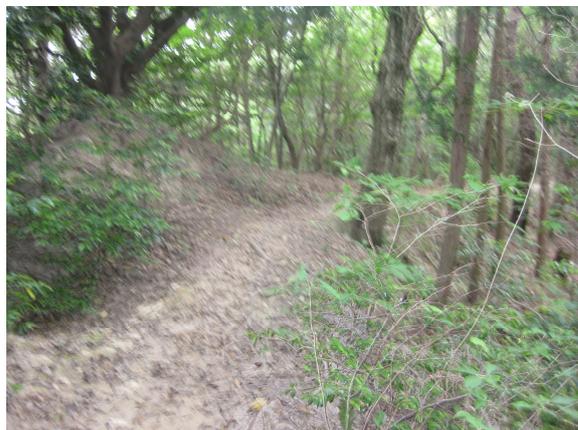
写 11 : 片江展望台からの福岡市遠望



写 12 : 片江山方面登山道



写 13 : 片江山方面登山道



写 14 : 片江山山頂 (標高 : 276m)



写 15 : 梅林緑道方面への登山道



写 16 : 梅林緑道方面への登山道



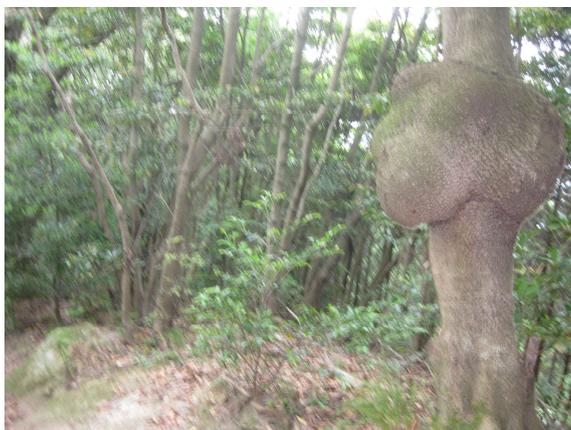
写 17 : 梅林緑道方面への登山道



写 18 : 梅林緑道方面への登山道の瘤がある木 1



写 19 : 梅林緑道方面への登山道の瘤がある木 2



写 21 : 梅林緑道方面への登山道



写 23 : 梅林緑道方面への登山道からの西側 (含 : 野芥) の遠望



写 24 : 梅林緑道登山口 (梅林緑道頂)



片江展望台

片江展望台は油山山頂、市民の森などへ行く途中にある福岡市内を展望できるスポットである。展望台付近には油山観音正覚寺、海神社、鎮西国師学寮跡、新羅式石門、鯛のお頭、光ヶ滝および浩然岩など多くの史跡名勝がある。本書の性格上、これらの史跡名勝は東油山に属するので説明等割愛する。

片江山山頂

片江山山頂にはそれほど広くはなく、ベンチはあるものの周りは樹木が生い茂り眺望することはできない。登山の休息に良い場所である。

梅林緑道頂

梅林緑道の頂は油山山頂、片江山山頂、片江展望台、妙見山山頂、天福寺廃寺および徳栄寺などへの登山口であったり下山口であったりするところであるとともに、標高 86m であり、町並みが眺望できる。

この梅林緑道は福岡市城南区の維持管理課管轄の公園である。この緑道は、内山敏典著『福岡都市圏歴史散策マップ記』によれば、1916 (大正 5) 年に着工し 1923 (大正 12) 年に竣工した曲淵ダムから旧浄水場 (現在の植物園) までの水道道である。梅林緑道はこの水道道区間にある。



紅葉の曲淵ダム



旧浄水場前の水道道



旧浄水場（現植物園）

梅林緑道の写真は上記の写 24 を参照のこと。

安楽城址本丸・二の丸マップ記

3. 安楽城址本丸・二の丸マップ記

荒平城は大友5城[荒平城(早良区東入部)、鷲ヶ岳城(那珂川市南面里)、岩屋城(太宰府市)、立花城(新宮町立花口)および柑子岳城(草場城:西区今津)]の一つで小田部鎮元(おたべしずもと)の居城である。城は油山連山の一峰である荒平山(標高394.9メートル)の頂上に約300坪の本丸跡がある。平戸より松浦鎮隆が荒平城に入り、小田部姓を受け継いだとされている。この小田部民部少鎮隆の養子として鷲ヶ岳城主大鶴宗雲の2男であった鎮元が荒平城主となった。

荒平城は肥前龍造寺隆信の3男である江上下総守家種を総大将に執行越前守、神代対馬守長良、曲淵河内守および山伏大教坊(中納言藤原兼光)などによって攻撃された。山伏大教坊(池田山:池田城主)は打ち負かしたが、立花城主立花道雪の援軍は間に合わず1579(天正7)年落城した。荒平城主の家臣やその末裔には、次郎丸の松尾大善(早良区次郎丸)、伊佐家(早良区小田部および高取(大西))および中牟田家(早良区東入部(熊本))などが有名である。

荒平城址(安楽平城址)については、上述の大友氏時代の安楽平城主小田部鎮元記述が一般的である。安楽平城の起源については、青柳種信著『筑前國續風土記拾遺 下巻』(532頁)のなかで、大内氏の家臣である飯田幸松丸(いいた こうまつまる)が1465(寛正6)年12月に安楽平城衆(じょうしゅう:城督にしたがって城の守りにつくこと)となったことに始まるとの記述がある。大内氏が滅びた後に1553(天文22)年に大津留宗雲(おおつる そううん:鷲ヶ岳城主)の息子(実子とも養子ともいわれている)である小田部鎮元が城主(城督)となる。1579(天正7)年9月、安楽平城は肥前国の龍造寺隆信の軍勢に攻められ、小田部鎮元と嫡子九郎が討死し、1580(天正8年)に安楽平城は落城している。後を継いだ次男の統房が翌年1581(天正9)年まで籠城し、9月11日に粕屋郡立花城に退去している。その後、遠孫(えんそん:遠く隔たった子孫)は柳川立花藩で活躍しているとのことであった。

ところで、荒平城址への登山ルートは現在の早良区大字重留の早良更生園から2つのルート(早良更生園の西側と南側へ向かう)、早良平尾ルート、脇山林道ルートおよび油山ルートがあり、本章では早良更生園の西側ルートからの説明となる。荒平山下山ルート(脇山登山ルートと同じ)は、城の原林道(脇山林道)の説明で、「夜叉谷」、「小田部鎮元の墓」と「小田部鎮元自刃之地」の碑その林道の西に「天子天森大神の碑(天子天が森)」、それを下ると「荒平神社」があり、そこに「小田部父子の墓」が3基ある。さらに下ると、大門信号を渡り「城の原バス停」に着く。

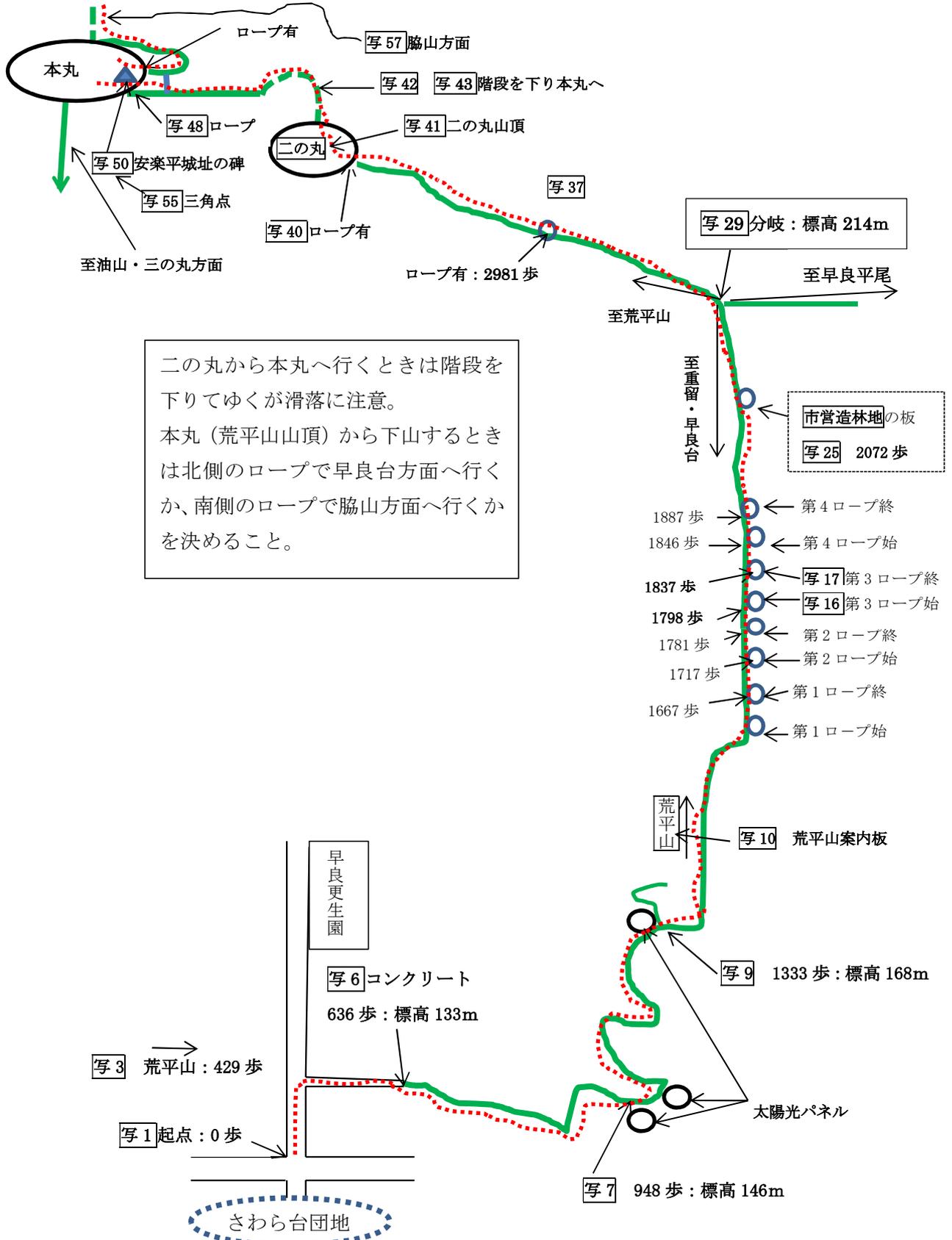
筆者は早良更生園西側からのルートからの登山は2001年6月が最初であった。今回(2020年5月)は最初の登山から約19年経っている。その間にこの登山ルートは、本丸のみにロープ取り付けられていたが、今回は尾根ルートの勾配箇所には多くのロープが取り付けられている。これは地域の有志の方々のご厚意によるものである。

(参考文献)

- 青柳種信著／広渡正利・福岡古文書を詠む会編校訂『筑前國續風土記拾遺 下巻』文献出版, 1993 年6 月. 531～532 頁.
- 加藤一純・鷹取周成共編／川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『筑前國續風土記付録 中巻』文献出版, 1977 年12 月. 422 頁、627 頁.
- 奥村玉蘭著／田坂大蔵・春日古文書を読む会校訂『筑前名所図会』文献出版, 1985 年12 月. 328 頁.
- 貝原益軒編／伊東尾四郎校訂『増補 筑前國續風土記』文献出版, 2001 年6 月. 627～631 頁.
- 伊藤常足編録『太宰管内史 上巻 筑前之部』日本歴史地理学会, 1908 年9 月. 174～176 頁.
- 福岡県早良郡役所『早良郡志』名著出版, 1973 年2 月. 前編226 頁、後編229 頁.
- 吉永正春『筑前戦国史』葦書房, 1997 年6 月. 132～142 頁.
- 石津司『安楽平城物語 その6』38 頁.
- 廣崎篤夫『福岡県の城』海鳥社, 1999 年7 月. 244～246 頁.
- 廣崎篤夫「ふくおか古城散策 第19 回 荒平城（安楽平城）・鷲ヶ岳城」『グラフ ふくおか』2001 年6・7 月. 24～25 頁.
- 西日本文化協会編纂「近代史料編 福岡県地理全誌（六）」『福岡県史』1995 年3 月. 28 頁、79～83 頁.

安楽平城址 (本丸：荒平山山頂：標高 394.8m：3976 歩：福岡市早良区内野)

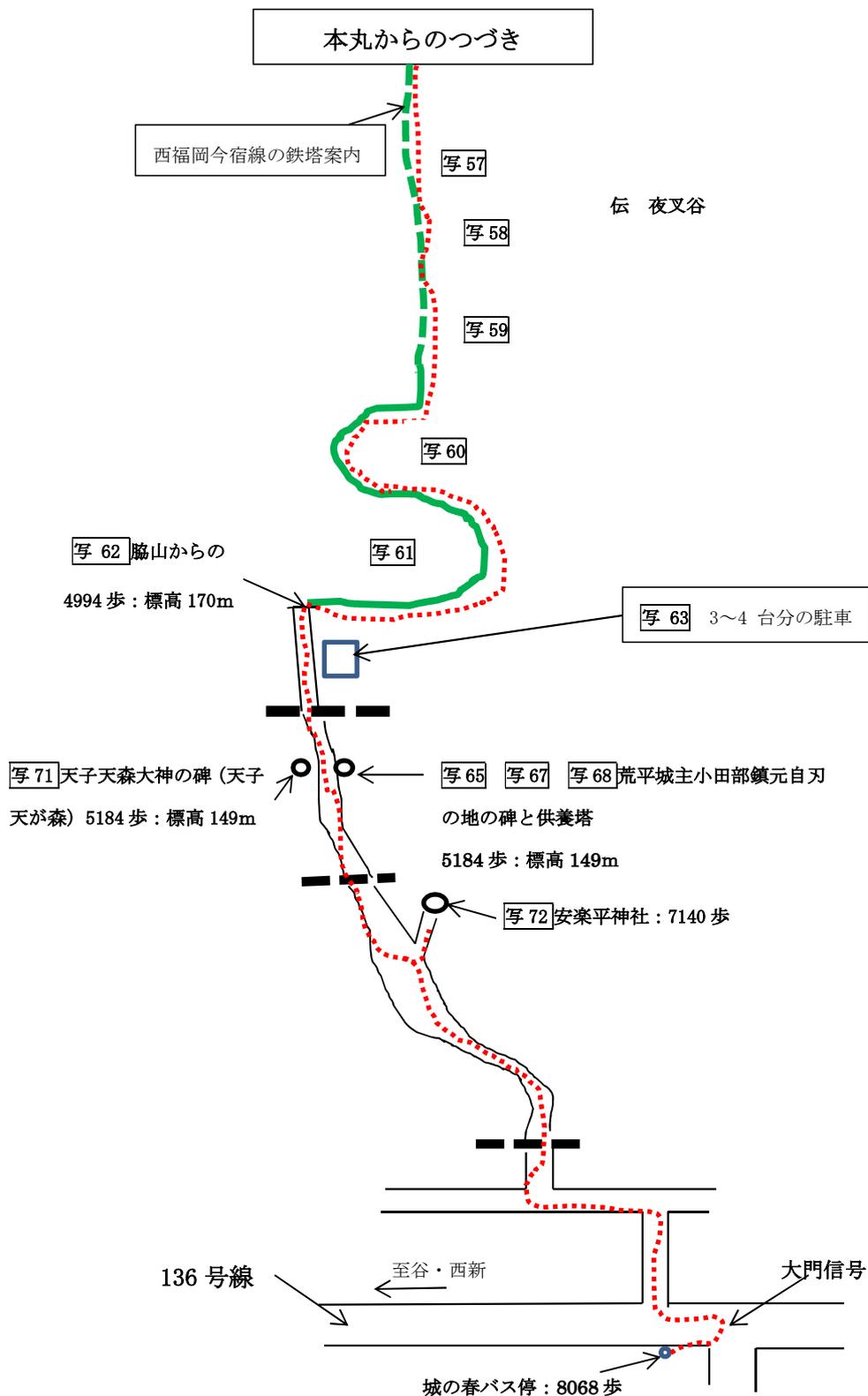
安楽平城址 (二の丸：標高 364m：3517 歩)



荒平城主小田部鎮元自刃の地の碑と供養塔（福岡市早良区脇山：5184 歩：標高 149m）

天子天森大神の碑（天子天が森：福岡市早良区脇山：5184 歩：標高 149m）

安楽平神社（福岡市早良区大字脇山：7140 歩：標高 120m）



写1：荒平山登山起点（0歩）



写3：荒平山入口案内板



写6：登山道



写 7 : 登山道途中のソーラー施設 1



写 9 : 登山道途中のソーラー施設 2



写 10 : 荒平山登山尾根道への案内板



写 16 第 3 ロープ始



写 17 第 3 ロープ終



写 25 : ロープで登る尾根道終了



写 29 : 分岐 (荒平山方面、重留方面、早良平尾方面)



写 37 : 荒平山方面尾根道にあるロープ



写 40 : 二の丸に上るためのロープ



写 41 : 二の丸山頂 (標高 364m : 3517 歩)



写 42 : 二の丸山頂から本丸へ向かうための階段



写 43 : 二の丸の下から見た階段



写 48 : 本丸 (荒平山山頂) へ上るロープ



写 50 : 荒平山 (荒平山山頂 : 安楽平城址の石碑 : 標高 394.8m : 3976 歩)



写 55 : 荒平山山頂 (本丸) にある三角点





安楽平城址から脇山を遠望

写 57 : 脇山林道 1



写 58 : 脇山林道 2



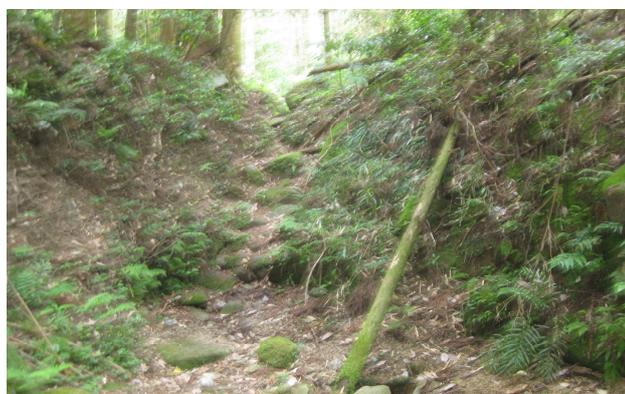
写 59 : 脇山林道 3



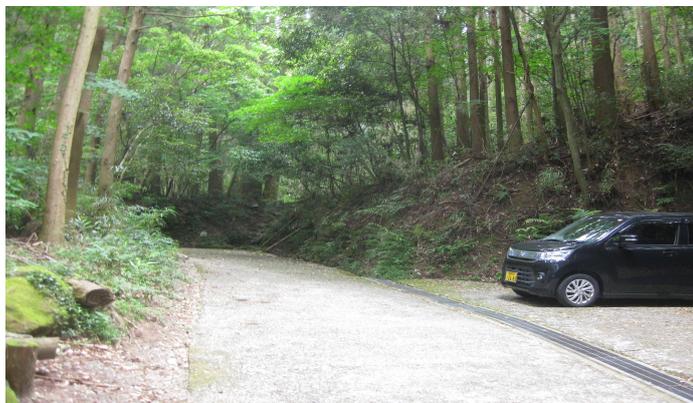
写 60 : 脇山林道 4 (夜叉谷付近)



写 62 : 脇山林道下山口 (脇山登山口)



写 63 : 脇山林道下山口（登山口）の駐車場（標高 159m : 4994 歩）



写 65 : 荒平城主小田部鎮元自刃の地（標高 149m : 8184 歩）



写 67 : 小田部氏の碑文



写 68 : 荒平城親子供養塔



写 71 : 天子天森大神の碑 (標高 149m : 8184 歩)



写 72 : 安楽平神社 : 7140 歩



荒平城主（安楽平城主）小田部鎮元、荒平城主小田部鎮元自刃の地之碑と供養塔

3章の本文を参照のこと。『日本人名事典』および『博多郷土史事典』に小田部鎮元に関する記載なし。

夜叉谷

奥村玉蘭『筑前名所図会』（328頁）に夜叉谷の記述有。小田部氏の正妻でない夜叉御前が、正妻の嫉妬により殺害され、城の南の谷に埋められている。夜叉御前はその後大蛇と化してこの谷に住むとのことで、この大蛇に遇った人はたちまち絶倒し病となって、死に至るといわれているとのことである。また、青柳種信『筑前國續風土記拾遺 下』（239頁）には荒平城主小田部鎮元（紹叱）墓から谷中を上ると鳥越という安楽平本城の東を越える小道があって、この小道の上が夜叉御前谷の場所とのことである。

天子天森大神の碑

荒平城主小田部鎮元自刃の地之碑と供養塔と同じ標高の西側にあるが、詳細は不明であるが、天子（てんし）とは、元々は天帝に代わり国を治めるという意味があるが、この場合この地を治めるという意味であろう。

安楽平神社

1579（天正7）年に龍造寺氏が早良に攻め入って戦争になり、小田部側の戦死者を祭っているのが安楽平神社で、毎年4月30日には地元の方々や。小田部氏にゆかりの人々による供養がなされている（www.city.fukuoka.lg.jpより参照）。

安楽平城址三の丸と武家屋敷跡（城下町跡）マップ記

4. 安楽平城址三の丸と武家屋敷跡（城下町跡）

荒平山山頂（安楽平城址）への南に向かうルートは、早良更生園を金屑川に沿いに登っていくと荒平城下町（武家屋敷）へ、さらに登ると安楽平城址三の丸へ、それを經由すれば安楽平城址本丸へと登ることができる。3章の早良更生園の西側ルートからの登山は二の丸や本丸までは分かりやすいルートであるが、登山道は最初から急峻である。これに対し、本ルートは油山への分岐[写 15] [写 16]までは比較的登りやすいルートである。しかしながら、このルートはこの分岐から先の登山ルートははっきりしない。[写 19]～[写 22]は金屑川沿いに上るほど平地が連なっているこの付近は荒平城下町跡とみなすことができる。もう一つの荒平城下町跡（武家屋敷跡）は[写 27] [写 28]は大きな平地が傾斜しながら上るごとに大きくなっている。これらを城下町跡（武家屋敷跡）とみなせるのではないかと考えられる。このような跡には井戸があるべきであるが、今回（2020年6月）の登山では見つけることができなかった。前回（2001年6月）の登山は[写 27] [写 28]付近までであった。

これからさきは道なき山登り、[写 29] [写 30]で、これを登りつめると三の丸の北斜面の石垣[写 31]～[写 38]に到着する。この地点から三の丸へ上るには滑落に注意しながら正規ルートへ移動しなければならない。移動したならばロープで三の丸に上ることができる。三の丸は3連郭の曲輪となっていて、南方面に進めば堀切を渡るとすぐ安楽平城址本丸へ着く。下山は3章の脇山林道からのルートで、城の原バス停に着いた。

（この章の参考文献）

青柳種信著／広渡正利・福岡古文書を詠む会編校訂『筑前國續風土記拾遺 下巻』文献出版, 1993年6月. 531～532頁.

加藤一純・鷹取周成共編／川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『筑前國續風土記付録 中巻』文献出版, 1977年12月. 422頁、627頁.

奥村玉蘭著／田坂大蔵・春日古文書を読む会校訂『筑前名所図会』文献出版, 1985年12月. 328頁.

貝原益軒編／伊東尾四郎校訂『増補 筑前國續風土記』文献出版, 2001年6月. 627～631頁.

福岡県早良郡役所『早良郡志』名著出版, 1973年2月. 前編226頁、後編229頁.

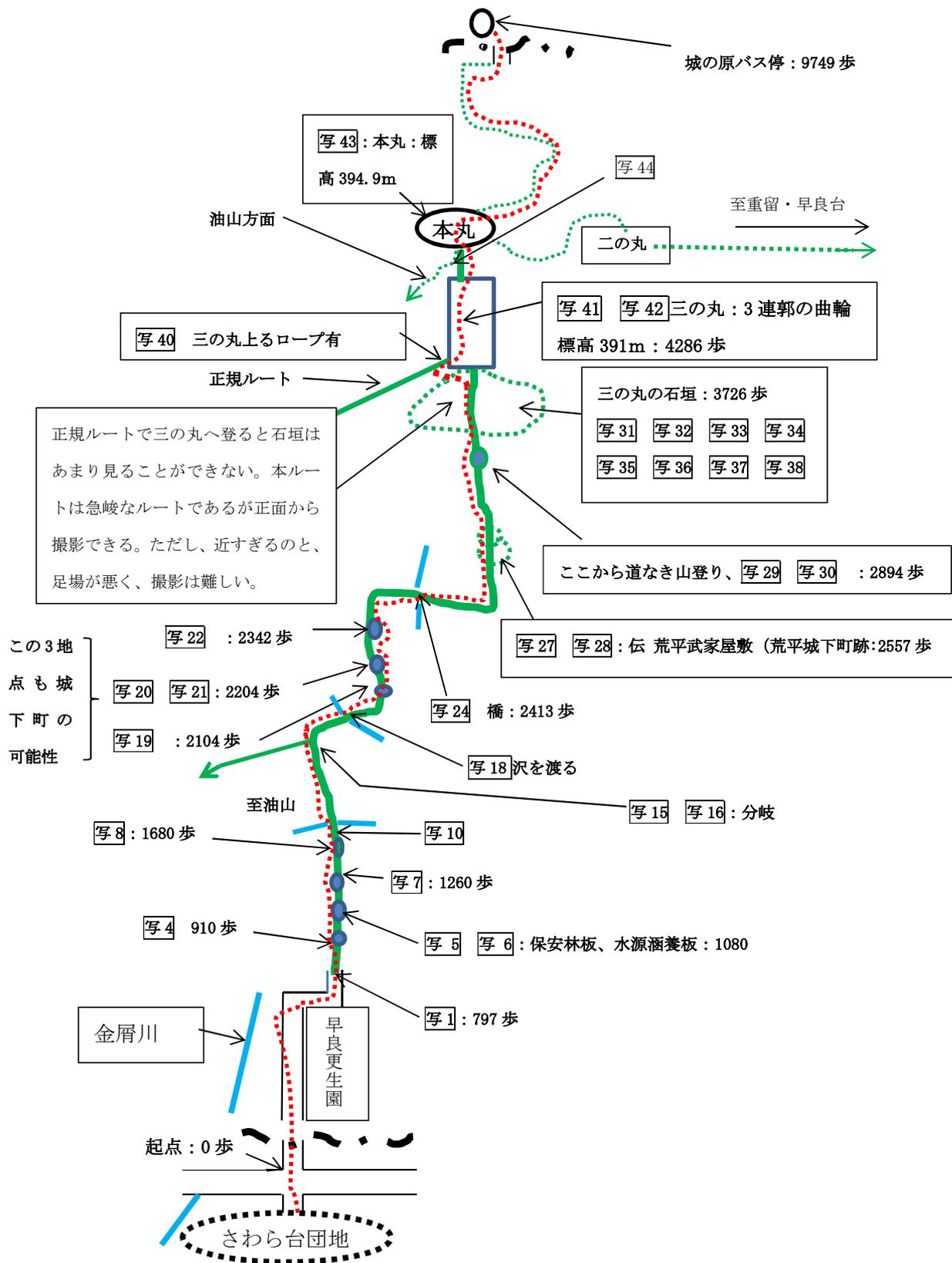
福岡地方史研究会編『エリア別全域ガイド 福岡市歴史散策』海鳥社. 2005年12月. 108～111頁.

廣崎篤夫『福岡県の城』海鳥社, 1999年7月. 244～246頁.

廣崎篤夫「ふくおか古城散策 第19回 荒平城（安楽平城）・鷲ヶ岳城」『グラフ ふくおか』2001年6・7月. 24～25頁.

荒平城址（三の丸：三つの曲輪の連郭：標高 391m：福岡市早良区内野）

荒平武家屋敷跡（荒平城下町跡：標高 230~330m付近：福岡市早良区東入部）



写 1:早良更生園からのルート : 797 歩



写 4 : 197 歩にある石垣



写5：保安林板・水源涵養板（左側）：1080歩



写6：保安林板・水源涵養板（右側）：1080歩



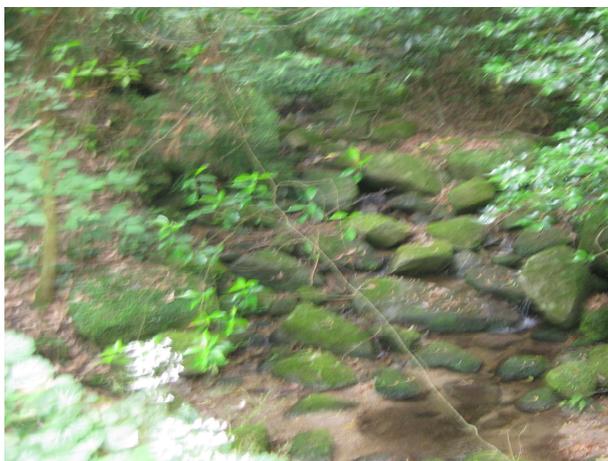
写 7 : 1260 歩の写真



写 8 : 1680 歩の写真



写 10 ; 石積みと白い花の植物



写 15 : 分岐 (荒平山方面 : 直進)



写 16 : 分岐 (油山方面 : 左側)



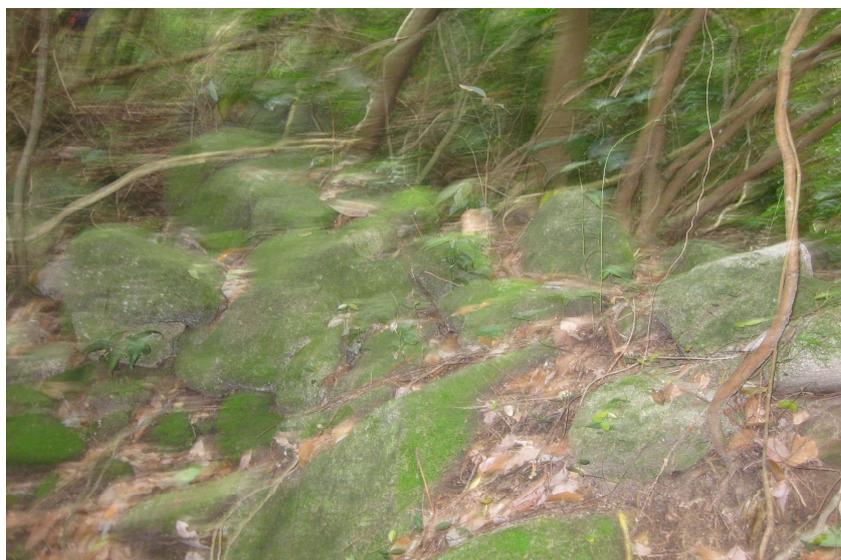
写 18 : 沢を渡る



写 19 : 荒平武家屋敷 (城下町) 跡の可能性 : 2104 歩



写 20 : 荒平武家屋敷 (城下町) 跡の可能性 : 2204 歩



写 21 : 荒平武家屋敷 (城下町) 跡の可能性 : 2204 歩



写 22 : 荒平武家屋敷 (城下町) 跡の可能性 : 2204 歩



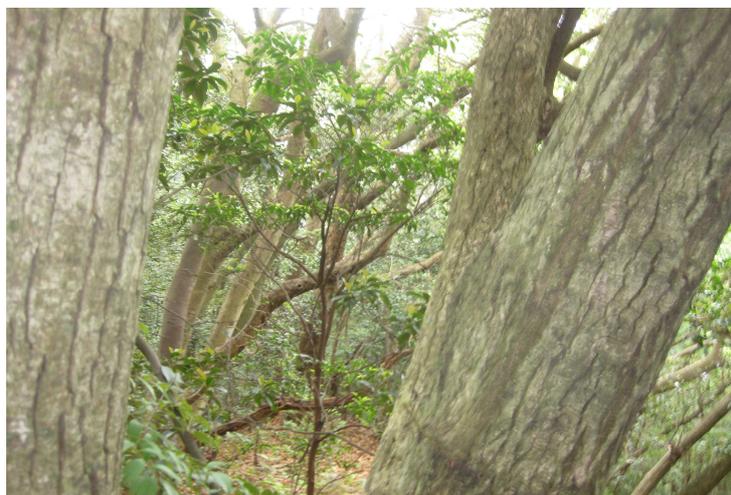
写 24 : 橋で沢を渡る : 2413 歩



写 27 : 荒平武家屋敷 (城下町) 跡 : 2557 歩



写 28 : 荒平城下町可能性の写真 : 2557 歩



写 29 : 道なき山登り : 2894 歩



写 30 : 道なき山登り : 2894 歩



写 31 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 1 : 3728 歩



写 32 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 2



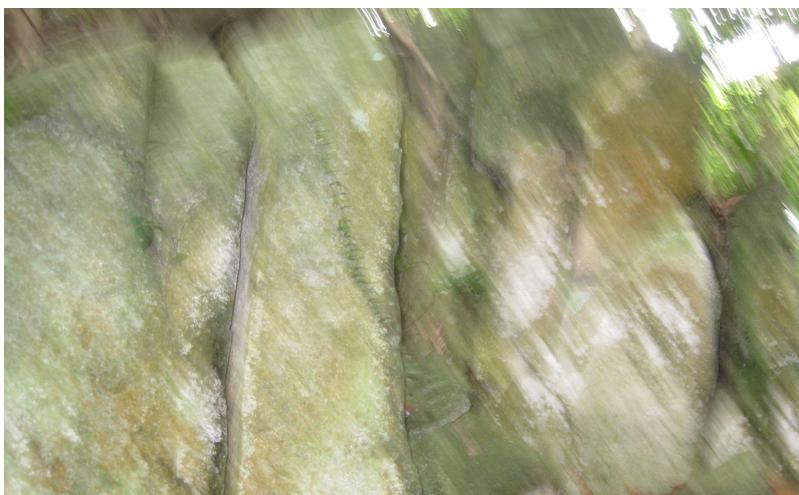
写 33 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 3



写 34 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 4



写 35 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 5



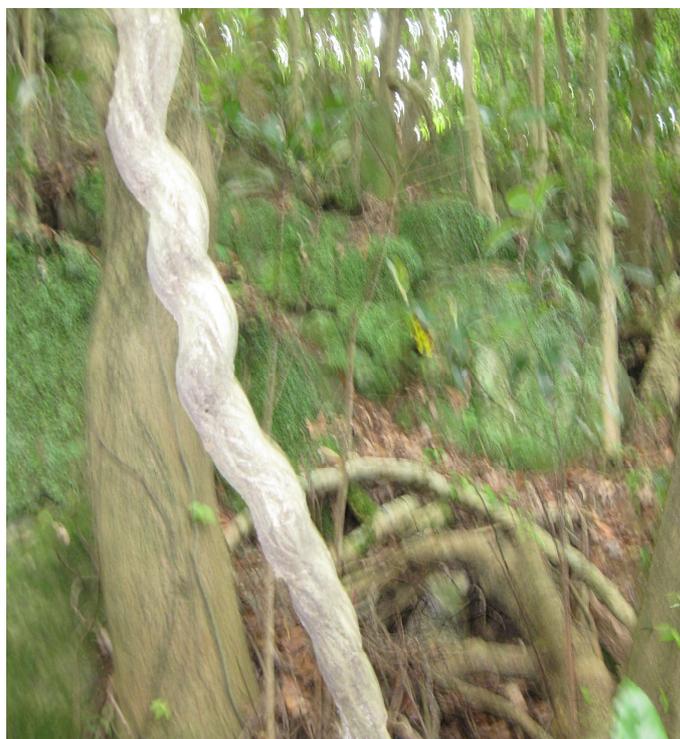
写 36 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 6



写 37 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 7



写 38 : 荒平城三の丸跡の北側斜面の石垣 8



写 40 : 荒平城三の丸跡へ正式ルートからロープで上る



三の丸北側斜面の石垣からこのロープのルートに移動するには
滑落する危険性があるので注意が必要

写 41 : 荒平城三の丸跡 (標高 319m : 4286 歩)



写 42 : 荒平城三の丸跡 (南北約 95mをこの写 42 のような水平の頂をいけば本丸へ)



写 43 : 荒平 (安楽平) 城址本丸 : 標高 394.4m



写 44 : 荒平 (安楽平) 城址本丸から油山へ



荒平城址本丸から脇山下山ルートで林道を通じて城の原バス停まで9749歩の歩きであった。

荒平城下町跡（武家屋敷跡）

安楽平城下町跡（武家屋敷跡）についての記述は、福岡県早良郡役所『早良郡志』（229頁）によれば「嶺を少し下れば、幾多の屋敷跡が認められる。この地点にあるのは重留方面のほうが弱いので、防御線のために設けられた」と記述されている。重留方面には、茶臼城址（ちやうすじょうし：早良区重留：土生宗観の居城）、菟道岳城址（うじだけじょうし：早良区重留：安楽平城の出城）があり、また現在の早良区入部出張所の裏に熊本という地名の場所があるが、小田部氏時代は熊本を蔵本といい安楽平城の食糧基地であったと伝えられている。また、安楽平城下町跡の記述は、福岡地方史研究会編『エリア別全域ガイド 福岡市歴史散策』（109頁）にもある。

2001 年当時の安楽平城址関連写真

5. 2001年当時の安楽平城址関連写真

2020年6月の荒平山登山をおこなってみて、荒平城址（安楽平城址）関連施設はこの19年の間2005（平成17）年3月20日の福岡県西方沖地震、2012（平成24）年7月11日～7月14日および2017（平成27）年7月5日～6日の九州北部豪雨などの自然災害によって登山道や城址の関連施設の地形が変わっていることを感じた。当時と今回とではカメラも異なり山の写真は分かりづらさもあるとともに、比較写真は少ないので、読者は参考程度とされたい。



荒平城の武家屋敷跡



菟道岳城址からの景色（東入部）



茶臼城址：城山（重留）



茶臼城址の石罫



大教坊の墓（池田）



池田城址の見張台跡



池田城址



安楽平城址（本丸跡）



安楽平神社境内の小田部親子の墓

おわりに

今回の西油山および荒平山の両登山をおこない史跡名勝（含：曲淵ダム関連の産業遺産）を再確認してきた。西油山地域は往古来今宗教関連施設がみられ、荒平山地域は中世の山城関連施設がみられるというそれぞれの特徴がある。両地域とも森林浴や歴史遺産はあるものの自然災害等の影響もあり、前回の登山に比べ遺構を確認できないところもあったが、基本的なところは確認できた。

とくに、荒平山地域は中世の山城の遺構がはっきりと現存していることは注目に値する。日本史を学ぶ人々にとっては、地域の遺構であっても、一見の価値があり、そこから興味を持つことによって多方面の分野へ応用できるであろう。興味を広げるために、福岡県には2020年に上梓した『筑紫国（福岡県）周辺の古代城跡からみる歴史―「まち」おこしとしての財産を活かすため―』のなかで古代山城の遺構を記述しているが、ここでの遺構は中大兄皇子（なかのおおえのおうじ：天智天皇）時代の全国的遺構も存在する。その他にも多くの遺構が早良区を含む福岡県には存在するので、興味を持たれる方々は著者紹介の地域史著書を参照されたい。これらは九州産業大学図書館および福岡市総合図書館などで閲覧できる。

読者はマップに歩数と写真、遺構の解説を記述しているので、参考にして散策されることを期待する。

【著者紹介】 内山 敏典（うちやま としのり）

現在、九州産業大学名誉教授

九州産業大学学術研究推進機構科研費特任研究員（令和4年3月31日迄）

専攻：統計学, 計量経済学

経済学修士

博士（農学）

【地域史著書】

『早良逍遥マップ記—歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ—』（単著）城島印刷, 2003 年.

『続 早良逍遥マップ記—鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ—』（単著）城島印刷, 2005 年.

『福岡都市圏歴史散策マップ記』（単著）九州産業大学産学連携室, 2009 年.

『福岡（筑前）およびその関連地域の歴史散策マップ記—とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について—』（単著）九州産業大学産学連携室, 2011 年.

『旧三瀬街道とその周辺逍遥マップ記—伊能忠敬一行の測量から 200 年を経過して—』（単著）九州産業大学産学連携室, 2015 年.

『唐津・多久・大町地域周辺散策記—歴史的遺産を通じて、現在・過去・未来を考える—』（単著）九州産業大学, 2017 年.

『路地から見る歴史と文化—「まち」おこしての財産を活かすため—』（単著）九州産業大学, 2018 年.

『筑紫国（福岡県）周辺の古代城跡からみる歴史—「まち」おこしとしての財産を活かすため—』（単著）九州産業大学, 2020 年.

【主要専門著書】

『アンケート調査に基づく専門教育科目の授業効果分析』（共著）九州大学出版会, 1989 年.

『消費需要の計量的分析—食肉消費を事例として—』（単著）晃洋書房, 1992 年.

『間接税改革の国際比較』（共著）九州大学出版会, 1993 年.

『統計解析技法』（単著）晃洋書房, 1993 年. 『消費構造の変容とその統計的分析』（単著）晃洋書房, 1995 年.

『余暇関連財需要の計量的分析』（単著）晃洋書房, 1998 年.

『増補 統計解析技法』（単著）晃洋書房, 1998 年.

『計量分析のための統計解析技法』（単著）晃洋書房, 2002 年.

『看護統計テクニク—基本からパス分析まで—』（監修）医歯薬出版, 2003 年.

『トピックス統計解析技法—電卓, Excel および VBA における計算法—』（単著）晃洋書房, 2006 年.

『基本計量経済学』（共著）勁草書房, 2006 年.

- 『経済・心理・医療・看護等の教育のためのベーシック統計解析技法—電卓, Excel およ VBA における計算法—』(単著) 晃洋書房, 2008 年.
- 『有田・伊万里および福岡地域における消費者の意識調査分析—新しい陶磁器需要創造および生産構造をめざして—』(共著) 九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター, 2009 年.
- 『柿右衛門様式学—“やきもの”の技法と歴史及び美—』(共著) 九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター, 2011 年.
- 『統計解析の基礎—データ解析の基本と実践—』(単著) 晃洋書房, 2015 年.
- 『経済・経営・心理・医療・看護等指導者のためのアンケート調査データ解析の技法—ACCESS・EXCEL ソフト、F-BASIC・十進 BASIC・VBA プログラムそれぞれの利用方法—』(単著) MyISBN - デザインエッグ社, 2018 年.

【主要専門論文・COE ・科研費論文の一部】

- 「畜産物消費の回帰主成分分析」『農業経済研究』第51巻第3号, 日本農業経済学会, 1979.
- 「MULTIPLE CLASSIFICATION ANALYSISによる英語授業効果分析—東海大学工学部福岡教養部を例として—」『東海大学外国語教育センター紀要』第5輯, 東海大学, 1985年.
- 「成人女性の食生活意識調査に基づく肉類需要分析—福岡市と佐賀市および両周辺地域を一例として—」『季刊家計経済研究』通巻第11号, (財)家計経済研究所, 1991年.
- 「消費需要の所得階層間分析」『季刊家計経済研究』通巻第23号, (財)家計経済研究所, 1994年.
- 「陶磁器需要の統計的分析—柿右衛門様式陶磁器需要との関連性について—」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第2号, 文部科学省 21世紀COEプログラム:九州産業大学, 2006年.
- 「徳川幕府期における伊万里焼国内流通の研究—筑前における陶器商人の役割を例として—」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第4号, 文部科学省21世紀COEプログラム:九州産業大学, 2008年.
- 「陶磁器需要推移の統計的分析—主として、マイクロデータに基づく多重分類分析によるアプローチ—」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第5号, 文部科学省 21世紀COEプログラム:九州産業大学, 2009年.
- 「少子高齢社会における食料問題意識に関するコンジョイント分析」『エコノミクス』第10巻第1号, 九州産業大学経済会, 2009年.
- 「地域産業が地域経済に及ぼす影響の計量分析」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第9号, 柿右衛門陶芸センター, 2013年.
- 「佐賀県における諸富家具生産者の意識調査分析」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第10号, 柿右衛門陶芸センター, 2014年.
- 「福岡県の伝統産業とその関連産業の構造分析—福岡県の産業連関表による計量分析—」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第12号, 柿右衛門陶芸センター, 2016年.
- 「唐津焼窯元の作陶に対する共通意識の計量分析」『伝統みらい研究センター』第1巻第1

号, 柿右衛門陶芸センター. 2018 年.
「伝統工芸品の需要構造分析—「家計調査」に基づく金額弾力性と数量弾力性からのアプローチ」『伝統みらい研究センター』第 1 巻第 2 号, 柿右衛門陶芸センター. 2019 年.
「博多織需要に関する成人女性意識の計量分析」『伝統みらい研究センター』第 1 巻第 3 号, 柿右衛門陶芸センター. 2020 年.
「アンケート調査に基づく専業主婦の陶磁器需要分析— 購入頻度からのアプローチ —」『中央大学経済学論纂』第 60 巻第 5・6 号(田中廣滋教授記念号) . 2020 年.

など多数。

西油山および荒平山周辺の歴史散策マップ記

2020 年 7 月 1 日 初版発行

著 者 内山 敏典

発行 地域史と統計処理のさわらラボ (<http://www.ut.saloon.jp/index10.htm>)

〒810-0801 福岡県福岡市東区西油山 4396

E-mail : uchiyama4396@minos.ocn.ne.jp

非売品

©Toshinori Uchiyama